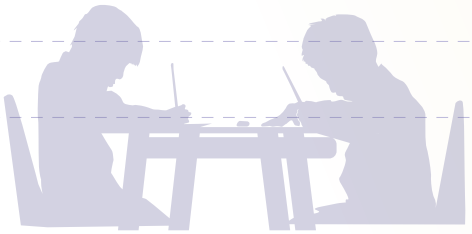
特集 「統一合判」中学入試レポート vol. 1

小学生の「5つの進路」を考える。私立中高一貫校を勧める理由！

今回は、4月から新5年生になった皆さんが初めて迎える小5「統一合判」テストだ。これから約1年半後の2017年中学入試にチャレンジしていくうえで、お子さんの受験勉強と並行して、保護者はお子さんが受験する「学校選び」の準備を進めていく必要がある。

折しも現在は、5年後に控えた「2020年大学入試改革」をひとつの節目に、日本の教育が大きく変化しようとしている時期。現在の小5のお子さんたちが大学受験に挑むときには、まさにその変化に直面することになる。そうした変化を意識して、いま小学生が選ぶことのできる「5つの進路の選択肢」から、親子でどの進路を選んでいくべきなのか、その点をここで考えてみたい。



首都圏模試センター

小学生と保護者が選ぶことのできる卒業後の「5つの進路の選択肢」を考える

12歳を迎える小学生が選べる卒業後の進路（中学校）は、いまの小学生の保護者がその年代の頃よりも、かなり多様化している。

かつては、居住地で決められた公立中学校に進学するか、それとも中学受験をして、私立中学校か国立大学の附属中学校を選ぶかという、大きくは3つの選択肢があった。

しかし、2000年頃から各地方自治体ごとに導入が進められた「学校選択制」や、1999年からスタートした公立中高一貫校の設置制度によって、全国の多くの地域（都道府県や市区町村）では、この2つのタイプの学校を含めた「5つの進路の選択肢」を、小学校卒業に際して選ぶことができるようになった。

このうちの公立中高一貫校は、すでに首都圏（ここでは東京・神奈川・千葉・埼玉・茨城の各エリア）では、今春2015年4月までに計22校（東京11校・神奈川4校・千葉2校・埼玉2校・茨城3校）が設立されている。さらに来春2016年には千葉県で、●県立東葛飾高校が附属中学校を開校し、現在小5のお子さんたちが中学受験に挑む翌2017年には、神奈川県で、●横浜市立サイエンスフロンティア高校が中学校を開校する予定だ。

なかには、そうした公立中高一貫校の（適性検査の）受検～進学を希望して、「統一合判」模試を受験する小学生のご家庭も少なくないだろう。この公立中高一貫校への進路も、この10年くらいの間に非常に増えている選択だ。ただし、気をつけておきたいのは、そうした公立中高一貫校は、個々の学校の募集定員が少ない（男女80名～最大でも160名）ところに、平均して男女800名前後もの多くの志願者（≒受検者）が集まることによって、かなり多くの不合格が出るということだ。極論すれば「ダメでもともと、受かれば儲けもの」といった性格の入試選抜になっている面も否定できないだろう。

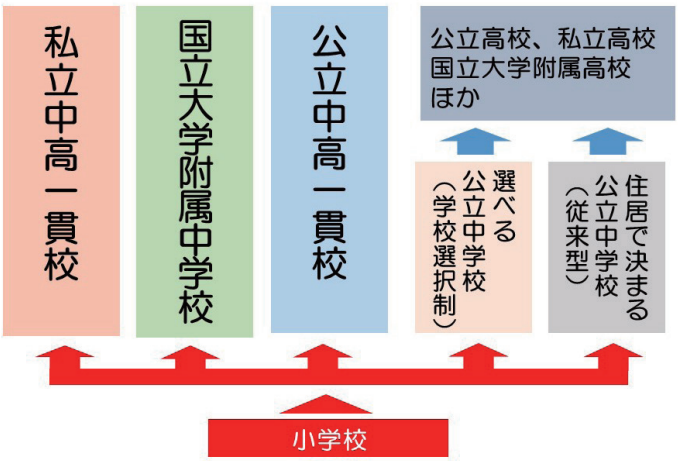
それならば、公立中高一貫校に関心を持ったことをきっかけに、お子さんの中学受験（受検）を考えたご家庭の保護者には、この機会に、それら公立中高一貫校との併願校としてでも、私立中高一貫校を「わが子の進路の選択肢」として検討していただきたいと思う。

保護者の意識の変化が目立つなか、8年ぶりに受験生数が増加した2015年の首都圏中学入試

次に、現在の5年生が、いまから1年半後の2017年入試に挑んでいくために、まず今春2015年の首都圏中学入試の結果に見られた、いくつかの動きを紹介しておきたい。最初にお伝えしたいことは、今春の中学入試では、保護者の意識の変化が目立ち、これまでの中学入試とは少し違った動きが見られたということだ。

首都圏模試センターでは、今年2015年の首都圏中学入試の受験生総数を前年の「42,800名」よりも400名多い「43,200名」と算出（推定）して

小学生の「5つの進路の選択肢」



※文中の●は男子校、●は女子校、●は共学校

今夏6月には中学棟新校舎も完成した桐朋中。素晴らしい教育環境が整った。

公表した。2007年以来、右肩下がりの傾向にあった首都圏の中学受験生数は、今年は8年ぶりに（わずかながら）増加に向かったわけだ。

とはいえ、個々の私学の志願者数の増減を見ていくと、求心力の強い（全体から見れば少数派の）私学が多くの人気を集め、それ以外の私学にとっては厳しい入試であった。志願者を増加させた私学よりも、志願者を減少させた私学のほうが多かったことも事実だ。その理由としては、以前から中学受験率が高く、私立中高一貫校の人気が高かったエリアで、従来のように2～3年の間、進学塾に通って、しっかりと受験勉強を重ねてきた受験生が減少傾向にあることがあげられる。

しかし、そうした状況下でも、新たな教育のスタイルの導入などの学校改革や入試改革を打ち出し、求心力を強めることができた私学には、前年より多くの志願者を集め、難化するケースが多く見られた。

今春から共学化し、校名も変更して新たな学校に生まれ変わった、●三田国際学園（旧･●戸板女子）、●開智日本橋学園（旧･●日本橋女学館）、●東洋大学京北（旧･●京北）などの話題校が、予想を上回る大きな人気を集め、入試のレベルも高まったことなどが、その象徴ともいえる。

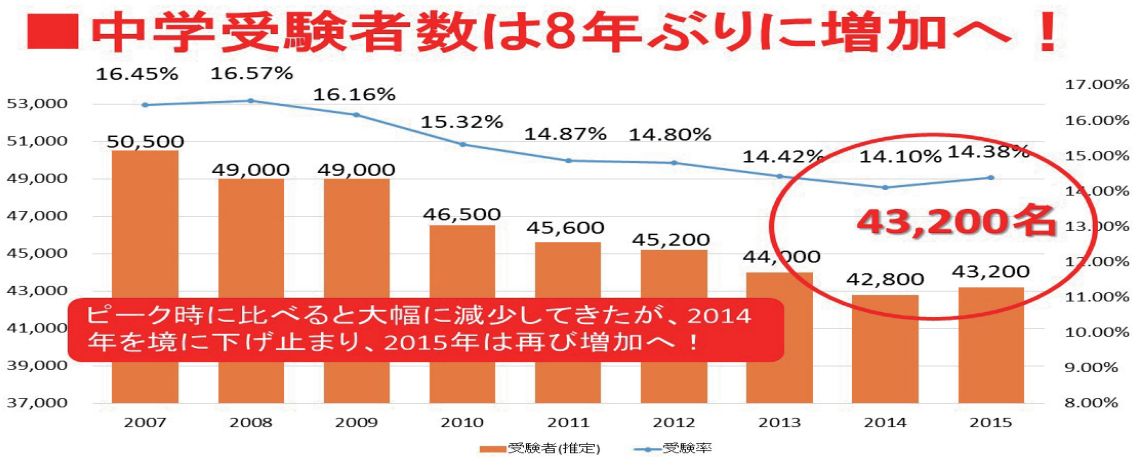
そうした意味で、今春2015年の入試は、今後の中学入試の動向を予想するうえでも、大きな転機を迎えたといえるだろう。

保護者の教育への注目を喚起した「2020年大学入試改革」の方向性とそこで問われる新たな学力観･学習観

こうして中学受験者数の減少が2014年の入試でいったん底を打ち、再び（わずかながら）増加に向かった背景には、やはり「保護者の意識の変化」がある。

そのひとつが、今春2015年の中学入試に挑み、4月から中学に入学した子どもたちが最初の当事者となる「2020年大学入試改革」の影響で、この改革に象徴される今後の教育改革の動きに、多くの保護者が敏感に反応したことだ。

今春の中学入試では、その「2020年大学教育改革」の先にある、「今後のグローバル社会で求められる力」を鮮明にし、自校の中高6年間の教育で育てていこうとする新たな力（21世紀型スキル）と、そのために必要な教育の方向性や



授業のスタイルを明確に打ち出した私学ほど、人気を高める結果となった。

そのひとつの象徴が、最近よく耳にする「アクティブ・ラーニング」というキーワードだ。

現在の中学1年生が高校3年生になる2020年は、東京オリンピック･パラリンピック開催の年。文部科学省はその年をターゲットイヤーと明言している。この「50年に一度」の世界的なイベントを節目に、東京を中心とした首都圏はもちろん、日本全体が、いま以上に大きなグローバル化の波に晒されることになる。

そうした今後の社会で求められる力（21世紀型スキル）を育てていくことが、今後の教育の課題であり、すでに5年後に迫った「2020年大学入試改革」と、それと一体型の『学習指導要領』改訂の大きな狙いでもある。

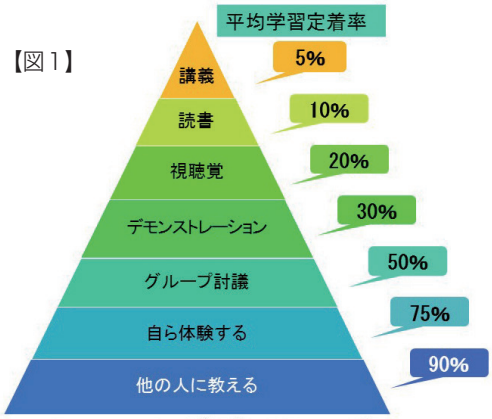
今回の「2020年大学入試改革」の方向性は、「知識の蓄積を限られた時間で正確にアウトプットする力」を問う現在の（多くの）大学入試のあり方を、「得られる知識を使って、課題を発見～解決する思考力･表現力･コミュニケーション能力」などを問う入試に変革しようとするものだ。

それは明らかに、明治期から今日まで、わが国で受け継がれてきた、従来の「学力観･学習観･入試観」を含めた「教育観」そのものを大きく変えようとするものでもある。

たとえば、最近教育の世界で紹介されることの多くなった、アメリカ国立訓練研究所(National Training Laboratories)によって開発されたといわれる「ラーニングピラミッド」という、学習の手法と学習効果の関係を段階に分けて説明したモデル図**【図1】**があるが、そこでは上から下に向かうにつれて学習効果が高まる（%が上昇する）とされている。講義をただ聞くよりも、討論したり、体験したり、学習者自身が教えた方が学習効果は高まるという説で、つまり学習者に主体性を持たせるほど効果的ということだ。

こうした考え方を学習のスタイルに反映させたものが、先の「アクティブ･ラーニング」であり、「PBL（Project-Based Learning＝課題解決型学習）」や「PIL（ピアインストラクションレクチャー）型授業」、「双方向型･対話型授業」、「ICT授業」などと呼ばれる新しい学習スタイルを含めた、いわゆる「21世紀（未来）型教育」と表現される教育の手法だ。

【図1】



ラーニングピラミッド
※出典:The Learning Pyramid
アメリカ National Training Laboratories

そしてこうした学習のスタイルが促す生徒の能動的な学びの根幹は、いま教育の世界でもうひとつの大きな話題となっている「IB（国際バカロレア）プログラム」も含めた「世界標準の教育」にも共通するものでもある。

こうした新たな「学びのスタイル」を、自らのめざす理想や教育理念と照らし合わせて、「本校は今後の社会で必要とされる力を育てるために、こういう教育をしていきます！」ということを、受験生と保護者に向けて広くわかりやすく発信した私学が、今春2015年入試でも注目され、人気を高めるケースが目立ったということなのだ。

現行の大学入試でも成果を伸ばし、今後の入試改革にも対応できる「21世紀型」教育が人気を集めた

しかし、こうした新たな「学力観･学習観」が注目される一方で、従来の大学入試に対応する「学力観･学習観･入試観」の必要性を重視し、中等教育の時期における「努力して知識をインプットする」学習で身につけられる力や、そうした学習姿勢、自律心などを「やはり大切にすべき」だと考える（比較的年齢の高い世代の）保護者や

教育関係者も少なくない。

現に今春の2015年大学入試では、東大を筆頭にした難関国公立大学や、早慶などの難関私立大学への合格実績を、多くの私立中高一貫校がさらに伸ばし、大学受験における“強さ”を一段と発揮した。

これもまた、公立小学校からお住まいの地域の公立中学校への進学という既定の進学先を選ばず、先の「5つの進路の選択肢」のなかから、あえて「中学受験」を経て私立中高一貫校へ進学するという選択をした、多くの受験生と保護者の期待に、それぞれの私立中高一貫校が応えた成果であることは間違いない。

東京大学への合格者数の「トップ10」は再び私立中高一貫校がほとんど独占しているし、今年も1～3名程度の東大合格者を出した、中堅の私立中高一貫校の成果の躍進にも大いに注目すべきだろう。

しかし、よく見ると、こうして今年の大学入試でも成果（合格実績）を伸ばした私学のなかには、先の「21世紀型教育」の要素を多分に取り入れ、すでに多くの授業でそれを実践してきた先進的な私立中高一貫校が数多く見られるのだ。

たとえば東大への合格者の増加が目立った●海城、●渋谷教育学園幕張、●市川などをはじめ、●芝、●暁星、●洗足学園、●鷗友学園女子、●立教女学院、●栄東、●かえつ有明など、先進的な教育のスタイルを導入している多くの私立中高一貫校が、それぞれ各私学オリジナルの「21世紀型教育」的な探究・体験・調査・研究・発表・討議・グループ（協同）学習に取り組むなかで育てた力を生かして、現在の大学入試でも成果を十分に発揮している。

来春2016年4月から共学化し、女子60名を受け入れる法政大学第二。

おそらく、こうした私立中高一貫校は、来年以降（2019年までの）の現行の大学入試制度のもとでも、確実に力を発揮し、さらに成果を伸ばしていくことだろう。そして、その先の2020年以降にも、多くの公立高校の成果をリードしていくに違いない。これも、巻頭の「5つの進路の選択肢」のなかから、私立中高一貫校への進学を勧める大きな理由なのだ。

従来とは変わってきた保護者の価値観が、わが子の学校選びにも反映されて、「偏差値を飛び越える」併願が出現

そして、もうひとつ今年の中学入試で浮き彫りになった「親の意識の変化」として、これまで保護者にとって学校選びの非常に大きなファクターであろうと思われてきた大学合格実績（進路）についても、「大切なのはそれだけではない」といわんばかりに、従来とは少し違った視点や価値観で、わが子の学校選びをする（多くは若い世代の）保護者が目立ってきたことがあげられる。

現在の中学受験生（＝小学生）の保護者の多くは40歳～45歳前後の世代。バブル景気が弾けた後に社会人となり、その後のリーマン・ショックや大震災の影響も重なった長く厳しい不況を生き抜いてきた世代でもある。そういう現在の中学受験生の保護者の世代にとっては、「学歴（学校歴）」への価値観は、やはりかつての保護者の世代と大きく違っていても不思議はない。ことさら、わが子の難関（有名）大学進学にはこだわらず、別の価値観や教育観で学校選びをする保護者が増えてきたといってもいいだろう。

そうした若い保護者の世代の意識の変化が、さまざまな意味で入試の動向にも反映されたのが、今年2015年の中学入試だった。

そのため、まだ入試レベルはさほど高くなく（見かけの偏差値は低く）、大学合格実績も少ない学校であっても、教育のスタイルやめざす理想が保護者の価値観と一致した（新たな期待や好感を集めた）私学が、予想以上に多くの人気を集める動きが見られたことも、この2015年入試の特

徴のひとつといえるだろう。

そうした新たな保護者の価値観、学校選択の価値基準によって、「偏差値にとらわれず」「偏差値を飛び越える」ような、柔軟な学校選択をするケースも目立ってきた。

そして、そこで選ばれたのはどのような私学かというと、先ほどの「21世紀型教育」をすでに実践している私学や、あるいは今後、積極的に導入～推進していく教育改革の姿勢を鮮明にした私学だったといえるだろう。

冒頭で触れた、今春の共学化･校名変更と同時に新たな（今後の「IBプログラム」の導入も含む）コース制を導入して注目を集めた●三田国際学園や●開智日本橋学園をはじめ、やはり「IBプログラム」の導入も含め、日本初の「ハイブリッドインタークラス」を新設した●工学院大学附属、カナダの教育プログラムと日本の教育課程を並行して履修できる「ダブルディプロマ」を導入した●文化学園大学杉並、すでに多くの帰国生を受け入れリベラルアーツと独自の感性教育を実践する●かえつ有明、SGH指定校として成果をあげてきた●順天、思考力セミナーやレゴブロック講座など体験型の授業と説明会が好感を呼んだ●聖学院などが、そうした好例といえるだろう。

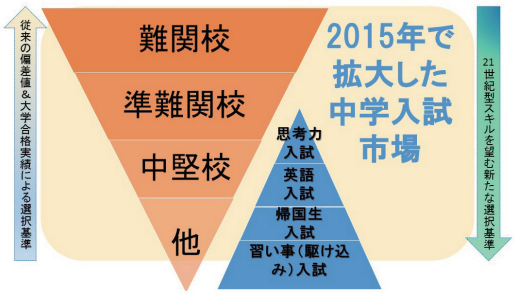
そうした、いわゆる「21世紀型教育」と“世界標準の”学びのスタイルを標榜し、「子ども（生徒）自らが自発的･能動的に“楽しく学べる”授業スタイル」を導入～実践しようとしている私学が、前年以上の人気を集めたことにも注目しておくべきだろう。

新たな中学受験市場が生まれた、この2015年を転機に 2016～2017年入試は再び活況へ！

そして今春2015年入試では、そのほかにも従来とは違ったいくつかの動きが見られた。

入試状況を示すデータからは見えにくいが、それまでサッカーや野球、テニスなどのスポーツ、音楽、ダンス、バレエ、スイミング、絵画、習字、英会話や英才教室、能力開発教室などの「習い事」に力を入れてきた子どもたちが、6年生になって

今春2015年入試で拡大した新たな中学受験市場



から、あるいは6年生の途中から個別指導塾などに通って中学受験をめざす「駆け込み受験（＝習い事受験ともいうべきか）生」なども、確実に増えていると見られる。

こうした新たな受験者層の増加が目立ち、そうした従来の主流（塾で受験準備をしてきた）だった受験生とは少し違った層、違った受験準備のスタイルを経てきた受験生が増加したことによって、私学の側でもそうした子どもたちの資質や家庭の教育姿勢に期待し、迎え入れやすい形態の入試を実施し始めたことから、「新たな受験市場が生まれた」のが、今年2015年の入試だった。

こうした新たな受験者層を構成する若い世代の保護者は、親がわが子の進路や学習環境について「これがよい」と決めつける以前に、わが子に「多様な体験をさせてあげたい」、「子どもがやってみたいと望むことを応援（サポート）してあげたい」と望む、ミレニアム世代の親たちだ。そうした新世代の保護者は、家族で過ごす時間も大切にしつつ、わが子が何かに夢中になって取り組む姿を見ることを喜び、そういう体験を強く願う世代でもある。

また、それは中高の6年間に、学習だけではなく、課外活動や行事、部活動なども含めて、学校生活全般で「多様で豊かな」体験をわが子にさせたいと願う傾向の強い保護者といってもいい。そして、そうした家庭には「心の教育」も大切に考える親が多い。

こうして2015年入試に「保護者の意識の変化」と「新たな中学入試市場」が生まれてきたことは、そうした世代の保護者の家庭から、子どもたち（中学受験生）を迎え入れる私立中高一貫校にとっ

ても、意識の変化を促すことになる。

すでに現実のものとなった「英語入試の増加」や「思考力入試（適性検査型入試）の増加」をはじめ、スポーツや音楽などの「習い事」に打ち込んできた多くの小学生を、従来の受験スタイル（2～3年塾に通って受験勉強をしてきた）とは違った準備スタイル（小6になってからや小6の夏以降から中学受験をめざし、短期間の塾通いや個別指導などで準備をしてきた）の、いわゆる「駆け込み（習い事）受験生」に対しても門戸を広げるような新たな形態の入試を新設する私立中高一貫校も増えてくるに違いない。

さらに、生まれた時からPCやゲーム、インターネットに接してきた「デジタルネイティブ」と呼ばれる世代の子どもたちは、それ以前の世代とは違った感覚やスキル、情報収集力を持ち、新しい価値を生み出せる感性や可能性を秘めている。いま教育の現場で注目される「ICT活用」も、まったく自然に、自分たちの学びのスタイルとして馴染めるのが、現在の子どもたちだ。

そうした新たな可能性をもつ子どもたちを迎え入れる形態の入試に向けて「多様な受験準備のスタイル」で挑んでいく小学生が増え、その一方で、2～3年塾に通ってしっかり力をつけてきた従来型の受験生が依然として中心となっていくことで、今後の中学受験市場は、さらに多様性と選択肢の増えた、活気あるものになっていくことだろう。その結果、中学受験に挑む小学生の数が今年以上に増えることも十分に考えられる。

この「多様化」傾向は、おそらく多くの私立中高一貫校にとっても望ましいことだろう。

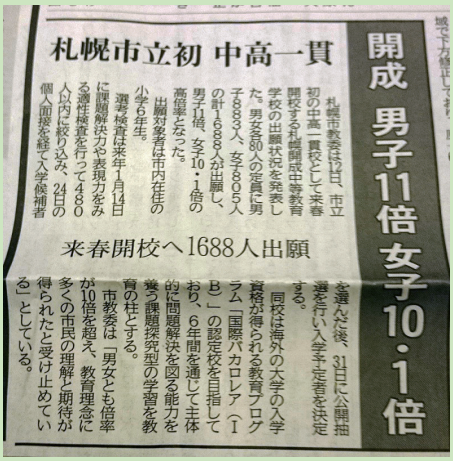
「2020年大学入試改革」の狙いのひとつに、大学の個性化･多様化があるように、入試の形態が多様になることで、それぞれの私学の教育内容や学びのスタイルを理解し、それを受験生と保護者が上手に選択してくれるようになれば、そこでは、単なる「大学合格実績による学校選び」や「偏差値による学校選び」は、数ある選択指標（価値基準）のひとつに過ぎなくなり、もっと個々の私学の教育内容の差異や、多彩な成果、校風･カラーが、受験生と保護者の意識にクローズアップされることになる。

そうした時代の変化と、変わる日本の教育の節目を迎える世代の子どもたちのために、「わが子にとって最良の進路」を探し、選んで、その学校への入学のパスポートを得るために親子でチャンレンジしていける中学受験。

2017年入試に向けても、すべての中学受験生と保護者が、そこで「わが子にあった」学びの環境を得られることを心からお祈りしたい。

首都圏模試センターが選んだ 2015年首都圏中学入試 重大ニュース

1.三田国際学園の爆発的大人気
2.開智日本橋学園の大人気
3.新設の東洋大京北の大人気
4.栄東の受験者数またも史上最多に！
5.札幌開成（公立中高一貫校）に1,688名応募
6.東京都市大付属の御三家併願者増加
7.開成･麻布･桜蔭など最難関校の応募者増
8.適性検査型入試の拡大（1000→2000→3000名）
9.私学の英語入試実施校の増加
10.帰国生入試応募者数の増加
11.マイペース出願開始!?
12.横浜英和女学院人気→青学大進学に期待
13.聖学院・昨年に引き続き人気増
14.「21世紀型教育を創る会」校の受験者増
15.麗澤の出願数倍増（実数は一割増）
16.偏差値的に低い学校も応募者増
17.サンデーショック
18.都市大付④ 2/6は大雪で午後入試に
19.中村中では「対話型説明会」開始
20.ついに「出願者ゼロ」の学校も…



札幌市立初 中高一貫

開成 男子11倍 女子10・1倍

札幌市教委は12日、市立初の中高一貫校として来春開校する札幌開成中等教育学校の出願状況を発表した。男女各80人の定員に男子883人、女子805人の計1688人が出願し、男子11倍、女子10・1倍の高倍率となった。

出願対象者は市内在住の小学6年生。

選考検査は来年1月14日に課題解決力や表現力をみる適性検査を行って480人以内に絞り込み、24日の個人面接を経て入学候補者を選んだ後、31日に公開抽選を行い入学予定者を決定する。

来春開校へ1688人出願

同校は海外の大学の入学資格が得られる教育プログラム「国際バカロレア（IB）」の認定校を目指しており、6年間を通して主体的に問題解決を図る能力を養う課題探究型の学習を教育の柱とする。

市教委は「男女とも倍率が10倍を超え、教育理念に多くの市民の理解と期待が得られたと受け止めている」としている。

2014年12月14日北海道新聞〈夕刊1面〉より

最新入試情報　2016年人気動向編

2016年～2017年にかけての人気動向を変化させる私学の教育･学校改革！

～最新の入試状況をつかみ、変化のなかに新たな注目校や合格へのヒントを見出そう！～

●①2/1、②2/2の2回入試を実施する桐朋の素晴らしい新校舎と「次の学びプロジェクト」に注目を！

来春2016年入試での入試改革として、これまでは2月1日のみの1回入試を実施してきた●桐朋〈東京都国立市。男子校〉が、来春は、①2/1（定員約110名）、②2/2（定員約70名）の2回入試を行うことが公表されている。男子の受験生にとっては大きなニュースだ。

2012年からスタートした新校舎建築とキャンパスの全面リニューアルは、2013年6月の教科教室棟の完成、2014年6月の共用棟･新高校棟の完成を経て、今夏2015年6月には新中学棟が完成。6月末には中学生が真新しい校舎に引越しをして、7月からは新たな教育環境ですべての生徒が過ごせる形になる。

そして桐朋中学･高等学校では、この新校舎建築を期に、2013年から「次の学びプロジェクト」をスタートさせ、次世代の子どもたちに必要な力を育てるための新たな教育のあり方を検討し、その実践のために必要な環境や設備を新校舎の設計に反映してきた。そして中学生、高校生とも完成した新校舎に移り、新たな学校生活を歩み始めたこの期に「これからの桐朋教育」を世に伝え、そこへの評価を問うために、来春2016年の中学入試では大きな改革に踏み切ったという。今後の人気動向の変化に注目しておきたい。

●共学校となる法政大学第二の女子募集定員は、計60名〈①40名、②20名〉に！

早くから予定が公表されてきた通り、●法政大学第二〈神奈川県川崎市。●男子校〉が、来春2016年から中学･高校ともに共学化される。今回の共学化は、それまで吉祥寺にあった●法政大学第一中高を2007年に三鷹市に移転し、●法政大学中高への校名変更と共学化を同時に行った改革に続く、法政大学の付属校改革の第二ステージと位置づけられている。

同校では、この期に新校舎建築に着手し、すでに2014年4月には第一期工事が完成し、教室や体育棟･文化棟が新しくなっている。来春2016年4月には講堂や図書館･食堂が新築される。この共学化にあたって校名変更はないが、制服は（男女とも）一新される。

現段階で公表されている来春2016年の中学入試要項（予定）は下記の通り。

①2/2　男子100名･女子40名　4科
②2/4　男子50名･女子20名　4科
帰国生入試　1/10　男女各若干名　2科

入試日は今春2015年入試と変わらないが、男子の募集定員は従来の175名より25名削減されることになり、帰国生入試が新設される。新たに募集される女子は男子より募集定員が少ないため、難易度もやや高くなる可能性が大きいだろう。

●芝浦工業大学中は2017年4月から豊洲に校地移転。校名を芝浦工業大学附属中として、国･算･理の3教科入試に！（高校のみ共学化へ！）

これも早くから伝えられてきた通り、●芝浦工業大学中〈東京都板橋区。男子校〉が、現在の小学5年生が受験する2017年入試から国･算･理の3教科入試となり、4月からは豊洲の新キャンパスに移転する。校名も芝浦工業大学附属中という、東京都内の理工系4私立大学のひとつである芝浦工大の附属校色を鮮明に打ち出す形に。さらに高校のみ共学化して、男女ひとクラス（各25～30名）ずつを募集し「理科系志望女子」を迎え入れる。

ただし、これまでどおり他大学への受験にも十分対応できるよう学習･進路指導には力を入れていくという。

まさに「2020年東京オリンピック･パラリンピック」エリアである豊洲への移転により、江東区で唯一の私立男子中学校となる同校の今後の人気動向が大いに注目される。

2017年4月に豊洲へ移転する芝浦工業大学中の新校舎完成予想図。